

青森県立郷土館所蔵 青森りんご史先人資料

太田原慶子¹⁾

Keiko , OAHARA :Pioneers of Aomori Apple Farming :History of Apple Industry

Keiko OAHARA

キーワード：相馬貞一 澁川伝次郎 竹嶋儀助 木村甚弥 福島住雄 淡谷悠蔵

はじめに

青森県立郷土館では、明治期から昭和期にかけて本県の発展に貢献し県内外で活躍した人物（先人）の資料を収集し紹介している。これまでに収蔵された資料の中から、本県のリンゴ産業を支えてきた先人の資料を紹介し、公開活用を図りたいと考える。現在、当館に資料が収蔵されているリンゴ産業関連先人には、明治期、生産者の組合を作り指導的な役割を果たした相馬貞一（そうまていいち）、研究者として病虫害防除に取り組んだ木村甚弥（きむらじんや）、リンゴ剪定技術の指導者であり、またりんご協会を創設に尽力した澁川伝次郎（しぶかわでんじろう、本稿では伝次郎と表記）、生産予測など基礎研究の土台を築いた福島住雄（ふくしますみお）、マメコバチを研究し、その普及に努めた竹嶋儀助（たけしまぎすけ）がいる。各先人資料から注目すべき資料について紹介したい。

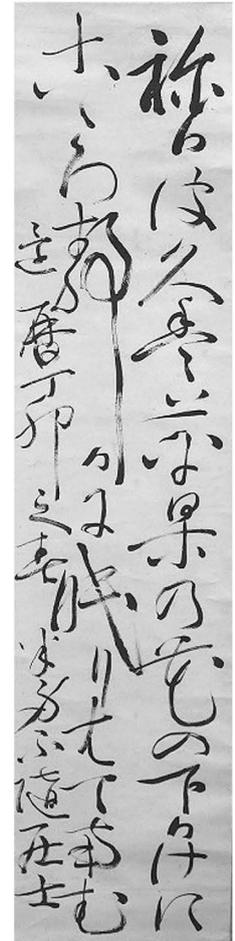
相馬貞一資料

相馬貞一（1867～1935年）は、竹館村唐竹（平賀町、現平川市）の素封家（地主）の家に生まれた。東京専門学校（後の早稲田大学）に進んで、政治家を志すが、父親が病に倒れたため中退。帰郷後、村内農民の生活向上を目指し、本格的にリンゴ栽培を始めた（貞一のリンゴ園は「採美園」と名付けられた）。

貞一は、明治30年（1897）、栽培技術の研究と普及のため、苹果栽培同志会を作った。さらに、同37年（1904）には竹館村園芸同好会、40年に竹館林檎購買販売組合を結成する。この組合は、日本で最も早く成立した本格的な産業組合といわれる。共同出荷及び共同仕入れ、さらに、組合内で品質検査を実施、査定基準を制定するなど、大正期には全国有数の模範的な組合になった。

また、採美園で栽培されたリンゴの品質の信用は高く、各種の品評会で入賞している。昭和3年（1928）には、大嘗祭献納用にも選ばれた。

貞一は、組合員の教育にも熱心で、私費で図書を集め公開した大正文庫や土曜会とよばれる勉強会を開設したりもしている。また、貞一は和歌をたしなみ、自邸でも歌会を催した。『相馬貞一翁傳』（相馬貞一翁頌徳会発行・昭和59年）によると、和歌の自筆草稿が相当量あったという。



①「願わくばりんごの花の下陰にしづ心なく眠りはてなん」好んで何度も書にしたという



②大正15年（1926）、県農事試験場技師になる

澁川伝次郎資料

澁川伝次郎（1898～1991年）の祖父伝蔵は、興農会社（元弘前藩士らが中心になって黒石で開いた大規模リンゴ園）の出資者の一人で、黒石の豪商だった。伝次郎は、現在の弘前市にあった渋川西農園を昭和元年（1926）まで経営するが、倒産。その後、県農事試験場の技師になるが、昭和2年（1927）3月に退職^②。そして、青森市新城でリンゴ園を開いていた淡谷悠蔵（あわやうぞう・1897～1995年・青森市出身の文学者、政治家。同市出身の歌手淡谷のり子の叔父）と農園共同経営生活を始めた。

註)

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

淡谷との出会いについては、昭和38年（1963）に陸奥新報に連載された「渋伝とりんご」（6月1日～7月25日、55回）に詳しいが、伝次郎は「新しき村」青森支部を設立していた淡谷との理想の農園生活を夢見たという（2）。しかし、半年後には黒石に戻った。

その後、島善鄰（しまよしちか・1889～1964年、1916年から青森県農事試験場技師、1950～54年まで北海道大学学長）の薦めで『りんごの剪定』を執筆する（昭和3年・蔵館村農会発行・館蔵資料は昭和9年発行の第二版を複製したもの、りんごの剪定のみを取り扱った県内初の書とされている）。そして、昭和9年（1934）から再び農事試験場で働き始め、県南地域のりんご栽培と研究にあたった。

戦後、荒廃した県内のりんご園を復興するために精力的に活動を展開し、昭和21年（1946）には、りんご生産者で組織する青森県りんご協会を設立した。また、剪定講師として各地を巡って技術の普及に努め、協会内をはじめ生産者から信頼され、指導的な役割を果たした。

伝次郎は、「りんごを作るならまず人を作れ」という信念を持ち、生産者に対して広い意味での社会教育を行った。昭和31年（1956）、河北文化賞を受賞するが、その受賞式で「百姓には学問がいらぬといわれたが、私は百姓こそ学問が必要であると強調したい。」と語っている（③：河北新報、昭和31年1月8日）。

表紙に「澁川蔵」とペン書きがある雑誌『新園芸別冊 栽培技術と経営りんご』（朝倉書店発行・昭和26年・④）は、島善鄰をはじめ、当時のりんご栽培における県内外の研究者らが執筆したものである。島は、巻頭で「今後のりんご栽培」について述べている。無袋栽培の導入、検討の必要を説く箇所に、伝次郎によるものと思われるがチェックが施されている。

本稿関連の先人による項目は以下の通りである。伝次郎は「青森県のりんご栽培」、生産者として無袋栽培や中耕栽培など実験的な栽培を実施した淡谷は「りんご園経営における諸問題」、木村甚弥「りんごの貯蔵と病害」・「りんごの病害と防除法」、福島住雄「りんご栽培暦 国光の一年」。本資料は、戦後のりんご産業の研究状況を知る上で貴重な文献である。

平成4年（1992）、県りんご協会は澁川伝次郎賞を制定、毎年りんご栽培に功績のあった県内の生産者を表彰している（3）。

竹嶋儀助関連資料

竹嶋儀助（1898～1994年）は、藤崎町議会議員などを務めながらりんごを栽培、昭和25年（1950）頃からマメコバチの研究を本格的に始めた。昭和33年（1958）「マメコバチとりんごの交配」で、マメコバチをりんごの交配に利用する方法を発表した。これが専門家や生産者の関心を集め、その後の研究の端緒を作ったといわれる。

さらに、マメコバチ保存会を結成して、その利用と普及宣伝に努めた。手作業による人工授粉に追われていた農家（生産者）の労働力の軽減及び省力化に大きく貢献した。

また、ミカドドロバチを利用してハマキムシの被害を防ぎ、駆除することを試みるなど、天敵利用研究にも取り組んだ。この研究は、子ども向けの絵本『ドロバチのアオムシガリ』（文研出版・昭和48年）にもなっている。

昭和48年（1973）には、「有益昆虫の研究」により第3回木村甚弥賞を受賞した（⑤）。



③河北文化賞記念楯
受賞式での様子を伝える記事には、傳次郎のコメントも掲載されている



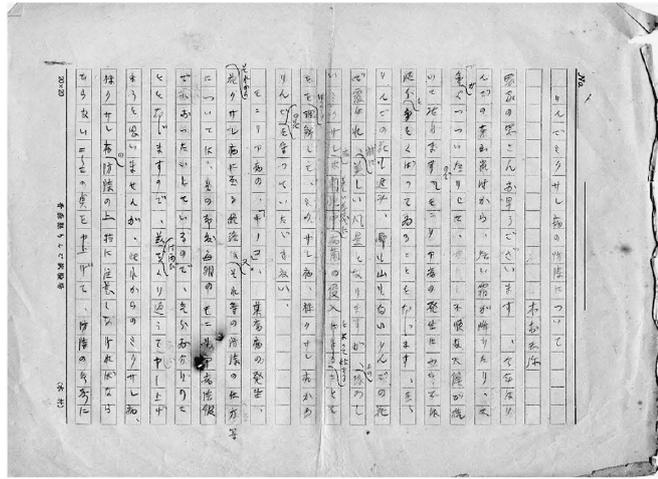
④『新園芸別冊 栽培技術と経営りんご』
表紙に「澁川」の記載がある



⑤木村甚弥賞記念メダル
裏に「竹嶋儀助殿」と刻まれている

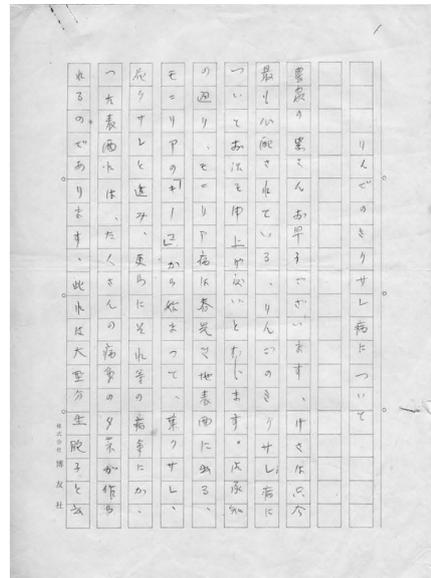
木村甚弥関連資料

木村甚弥（1901～1982年）の父甚吉は、平賀（現平川市）地域において、大正期、指導的地位にあったリンゴ栽培者だった。甚弥は、五所川原農学校卒業後、盛岡高等農学校（現岩手大学）農学科に進学した。卒業時（大正12）には、リンゴの褐斑（かっぱん）病に関する研究に取り組んでいる。そして、北海道（農事試験場）に赴任するが、昭和4年（1929）に青森県農事試験場園芸部（後の青森県りんご試験場）に技手として就任、以来役40年にわたってリンゴの病理とその防除法に取り組み、病害防除体系を築き上げた。特に、津軽地方の風土病といわれたモニリア病の解明や防除法の確立に大きく貢献した。



⑥甚弥自筆原稿「りんごミクサレ病の防除について」
青森県りんご試験場 木村専用原稿用紙5枚分、鉛筆書き

葉、花、実、そして株が腐ってしまう発生形態を明らかにし、防除のポイントを病原菌について正しく認識することを生産者たちに広く呼びかけた。平易な言葉でわかりやすく語ろうとする、講演や研修会のためと思われる下書き原稿が数種類ある（⑥⑦）。いずれも、書きかけではあるが、几帳面な文字が並び、何度も書き直され、よりわかりやすい表現を工夫した形跡がある。現場に出向いては、生産者の声を丁寧に聴きながら、彼らのために研究に取り組んだという甚弥の姿、努力を感じることができる資料である。



⑦甚弥自筆原稿「りんごのミクサレ病について」6枚 鉛筆書き

また、戦後、試験場の委託栽培地として無袋栽培に取り組んでいた淡谷悠蔵のもとを訪れ、熱心に調査指導に取り組む甚弥は、淡谷の小説『野の記録』や『海鳴り』にも登場する（4）。

昭和27年（1952）から45年（1970）までりんご試験場長を務め、その貢献により45年に木村甚弥りんご顕彰会が発足した。同顕彰会では平成28年度まで毎年、「木村甚弥賞」を贈呈していた（3）。同顕彰会の会議資料類には、受賞しおりの他受賞者選考資料も含まれており、各受賞者の業績内容を細かく確認しながら表彰文面などを検討する甚弥自身の書き込みがあるものもある（⑧）。さらに愛用したペン皿や筆記具がある（⑨⑩）



⑧甚弥賞受賞式のしおり
「J.K（日付）」の書き込みがある



⑨愛用のペン皿
裏に「園藝学会愛知大会記念 1950」



⑩愛用の万年筆
「祝 木村博士殿」

福島住雄関連資料

福島住雄（1921～1999年、熊本県）は、北海道帝国大学農学科（現北海道大学）卒業後、昭和23年（1948）に青森県苹果試験場（後の青森県りんご試験場）に赴任、同45年（1970）には同試験場長になる。花芽分化量や結実状況などの実態調査をもとにしたリンゴの生産量を予想する方式を考案したり、太陽黒点の変動がリンゴの生産と深い関わりのあることを指摘したりした。一方、リンゴ栽培も基本とも言える剪定の理論化をはかると同時にわい化栽培の必要性を強調し、その研究の基礎を築いた。

恩師である島善鄰から青森県に赴任するにあたり、「各地をよく歩き、手帳を持ち歩いて老人達の言うことをよく書き留めるように」と言葉をかけられたという。りんごの剪定技術や方法について、生産者達が実体験の中から得た技術や知識をこまめに聞き取り記録した。それらをまとめ、技術上達の助けとなるよう編集刊行されたのが、『りんご剪定葉隠れ論語』（青森県りんご試験場園生会・平成6年）である。

おわりに

青森のリンゴ産業は多くの先人たちに支えられてきた。それらの先人のうち、当館に、ゆかりの資料が収蔵されている先人は少ないが、改めて整理し検討を加えることによって新たな人物像、人とのつながりが見えてくる。明治期の大規模なリンゴ栽培、リンゴ園経営、産業組合創設と先駆的な事業を興し、指導的な役割を担った相馬貞一は、生産者（組合員）の教育にも熱心に取り組んだ。昭和期に入り、生産者の組織を立ち上げた澁川伝次郎もまた「人づくり」にこだわった。木村甚弥と福島住雄は、現場に立って生産者らの声に真摯に耳を傾け、研究を続けた。地道な研究を重ね、その成果を秘することなく公開した竹嶋儀助は、生産の現場にいる者だからこそ、広い視野を持ち、多くの知識を得ること、学ぶことの重要性を著書で述べている。

大正期から昭和30年代にかけてのリンゴ栽培の歴史は、文化的な角度から見ることでも興味深い点が浮かび上がる。例えば、淡谷悠蔵と澁川伝次郎をつないだ「新しき村」は、青森で農業に携わる青年たちが「リンゴ」を軸に新しい農業のあり方、生活の理想を求めた時期があったことを物語る。本稿で紹介したリンゴ先人資料を今後は、より広い角度からとらえて研究活用していきたい。

※註

(2) 「新しき村」は武者小路実篤が提唱。農業を基盤に人道的、理想的な生活を掲げた（大正7年）。悠蔵は、すでに新城で農業を始めていたが、武者小路の思想に共鳴し「新しき村」青森支部を設立した。

(3) 「平成29年版青森りんご」（県農林水産部りんご果樹課発行）、各種表彰受賞者一覧表（木村甚弥賞、澁川伝次郎賞、青森りんご勲章）

(4) 『野の記録』北の街社 昭和51年（1976）、『海鳴り』北の街社 平成16年（2004）

『青森県りんご百年史』には、昭和19年度の委託園に「東津軽郡新城村 淡谷悠蔵園」（581頁）とあり、そこでは次のことが行われた。「被害果の完全処理と、六月から八月までの間に十回の中耕を行ってモモシンクイガ（ハリトシ）の羽化を抑圧する方法をとらせた（結果、淡谷農園は「全滅」）。」淡谷の農園は「黎明草舎（れいめいそうしゃ）」と呼ばれた。



⑪黎明草舎で用いたりんご箱用ラベル

主な参考文献・企画展図録等

波多江久吉 斎藤康司編 『青森県りんご百年史』 青森県りんご百年記念事業会 昭和52年（1977）

青森県経済部りんご課 『青森県りんご発達史 第一巻』 昭和33年（1958）他

斎藤康司 『りんごを拓いた人々』 筑波書房 平成8年（1996）

淡谷悠蔵 『袖振り合うも わが想い出の人びと』 北の街社 昭和49年

『弘前市農業協同組合資料館所蔵りんご関係図書資料目録』 弘前市立図書館 平成15年（2003）

花巻新渡戸記念館企画展図録 『島善鄰—りんごの恩人—』 平成5年（1993）

弘前観光コンベンション協会講演会資料「菊池楯衛没後100周年、齊藤昌美生誕100周年記念講演会」平成30年（2018）

相馬貞一関連資料

資料名	内容	大きさ(cm)など	図版番号
歌幅	「願わくばりんごの花の下陰にしづ心なく眠りはてなん」	139cm × 33cm	①
短冊一式	「かねてよりはかなき世とは知りながらわかるべしをおもひかけきや」他	各36.5cm × 6cm	—
愛用の短冊入れ	金梨地蒔絵箱	40cm × 9.5cm	—
昭和大礼記念賞	昭和3年(1928)大嘗祭献上品に採美園のりんごが選ばれる。賞勲局から大礼記念賞。	径3.0cm	—
北海道東北六県農会連合(園芸)共進会 賞牌	昭和5年(1930)5月、県農会・県りんご組合連合会、東北六県北海道園芸業者大会が弘前公会堂で開かれた。	径5.5cm	—
大禮記念東都大博覧会果園光優良国産金牌	昭和3年(1928)	径5.5cm	—
書籍:『相馬貞一翁傳』	昭和59年(1984)、相馬貞一翁頌徳会発行	21.5cm、528頁	—

澁川伝次郎関連資料

資料名	内容	大きさ(cm)など	図版番号
書籍:『りんご曼荼羅 澁川伝次郎の足跡』	平成5年(1993)初版、財団法人りんご協会発行 扉に「第一号 澁川傳次郎先生 供 財団法人青森県りんご協会」の記載あり	21.5cm、578頁	—
書籍:『二十八日間のソ連』	澁川伝次郎著、昭和39年(1964)、緑の笛豆本の会発行 版画(木版)佐藤米次郎、装丁こぎん(特装版)、帙入り 1963年8月12～30日、ソ連視察、同行者に福島住雄	18.6cm × 15.8cm	—
雑誌:「栽培技術と経営 りんご」新園芸別冊	昭和26年(1951)、朝倉書店発行 表紙に「澁川所有」の書き込み、戦後のりんご技術者研究者の権威を集め出版。	27cm、232頁	④
書籍:『りんご栽培法』	伝次郎・潤一著 昭和30年(1955)初版、朝倉書店発行	21cm、120頁	—
書籍:協会叢書第19号『りんごの採取と貯蔵』	昭和27年(1952)、青森県りんご協会発行 木村基弥監修 伝次郎著	21cm、72頁	—
書籍:『りんご剪定図説』	昭和30年(1955)、青森県りんご協会発行 『りんご栽培法』中の剪定所論を普及版にしたもの	21.5cm、130頁	—
第5回河北文化賞(記念楯)	「リンゴの栽培を改良し、東北果樹産業界に寄与」、河北新報(昭和31年1月18日)、冊子「河北文化賞について」、河北文化事業団	24.2cm × 15.2cm	③
短冊、色紙一式	「山寺は静かなりけり苔の花 八十二歳 伝次郎」ほか	36.5cm × 6.5cm	—
新聞スクラップ(陸奥新報「澁伝とりんご」連載)	昭和38年6月7日～7月25日(全55回)		—
賞状一式	東奥賞、県褒賞、黄綬褒章、瑞宝章、黒石市名誉市民関連、園芸学会功労賞		—
卒業証書、辞令一式	青森県農学校卒業証書、時計賞褒賞、県農事試験場技師辞令ほか		②
参考資料:講演会関係他	家族宛書簡、葉書、写真、講演録音テープ		
参考資料:文献複写資料	著書「りんごの剪定」・青森りんご試験場50年史「追憶」(部分複写)・「津軽地区りんご矮性栽培を見て」(直筆原稿の複写)・「島善鄰先生を偲ぶ」(部分複写)、「覚 りんご普及部との話し合い(昭和49年)」(複写)		
家族宛葉書、書簡類	絵葉書(1963年、ソ連視察時家族宛)、書簡(昭和17～20年、室蘭から妻宛)		

竹嶋儀助関連資料

資料名	内容	大きさなど	図版番号
書籍:指導書『銀葉病の治し方』	非売品、昭和35年(1960)、りんご情報社発行	21cm、26頁	—
書籍:指導書『りんごの有利販売と貯蔵』	非売品、昭和36年(1961)、青森県農業研究倶楽部発行	21cm、26頁	—

書籍:指導書『マメコ蜂とリンゴの交配』	昭和33年(1958)、青森県農業研究倶楽部	21cm、22頁	—
書籍:『生物農薬 ミカド・ドロバチの効果』	非売品、昭和46年(1971)、青森県農業研究倶楽部	21cm、32頁	—
書籍:『われらかく闘えり-電灯漁値下げ運動史-』	昭和43年(1968)、津軽書房発行、装丁・カットは常田健	18cm、134頁	—
書籍:(絵本) 科学の読物シリーズ『ドロバチのアオムシガリ』	昭和48年初版(三版)、文研出版、岩田久仁雄著 (文研科学の読み物5、科学の読み物シリーズは全10冊) 竹嶋が資料提供(ミカドドロバチの研究)	22.6cm、80頁	—
木村甚弥賞メダル(第3回)	裏に「竹嶋儀助殿」の記載	径7cm	⑤
黄綬褒章	昭和55年(1980)	22.6cm×17.6cm	—
マメコバチの巣	箱入り	—	—
短冊	「倒されし竹はやがて立ち上がり倒せし雪は跡形もなし」	36cm×7.5cm	—

木村甚弥関連資料

資料名	内容	大きさ(cm)など	図版番号
書籍:『りんご栽培 全編』	木村甚弥編 昭和3年(1928)養賢堂発行 りんご試験場での研究業績をまとめた栽培参考書、木村甚弥、福島住雄、澁川潤一	22cm、942頁	—
直筆原稿「りんごミクサレ病の防除について」	原稿用紙(青森県りんご試験場、木村専用)5枚、書きかけ、鉛筆	12cm×29.4cm	⑥
直筆原稿「りんごウドンコ病防除に関する研究」	原稿用紙4枚、ペン	30.5cm×22cm	—
直筆原稿「りんごのミクサレ病について」	原稿用紙6枚、鉛筆	24.5cm×17.7cm	⑦
直筆原稿「りんごのミクサレ病について」	原稿用紙(木村専用の原稿用紙)7枚、書きかけ、鉛筆	23cm×29.5cm	—
書籍:『DISEASES OF FRUIT CROPS』	HARRY WARREN ANDERSON著、1956年、書き込みあり(鉛筆)	24cm、500頁	—
新聞スクラップ「外国農業視察記」	「米国の農業を見る」(昭和44年)、「アメリカの農業の素顔」(昭和45年)、「アメリカ農業の印象」、「ヨーロッパ農業 見たり聞いたり」、「ソ連から帰って」(昭和45年)		—
名札	「KIMURA 木村甚弥」、手書き、プレート	5.5cm×9cm	—
万年筆	「祝 木村博士殿」	長さ13cm	⑩
ペン	ペン先に朱のインク痕あり	長さ18.5cm	—
ペーパーナイフ	ケース(皮革、「ラジオ青森」)あり	長さ18cm	—
ペン皿	金属製、裏に「園藝学会愛知大会記念 1950」	24.5cm×9.5cm	⑨
木村甚弥りんご顕彰会理事会会議資料一式	昭和46年～55年		—
木村甚弥賞授賞式しおり一式	一部表紙に「JK、(日付)」(鉛筆)等書き込み、あり(第2回～第9回)		⑧

福島住雄関連資料

資料名	内容	大きさ(cm)など	図版番号
書籍: 園生会技術シリーズ11『りんご剪定業隠れ論語』	平成6年(1994)、青森県りんご試験場園生会発行、福島住雄著 試験場以来、親交のあった指導者や生産者たちから聞き取った「りんごの剪定」に関する言葉、格言をまとめたもの	21.5cm、288頁	—

淡谷悠蔵関連資料

資料名	内容	大きさ(cm)など	図版番号
りんごラベル	「無袋りんご・黎明草舎」	14.5×21	⑪